

海 流 の 涯 (はて)

天保竹島事件

嶋 丈 太 郎

平成21年9月

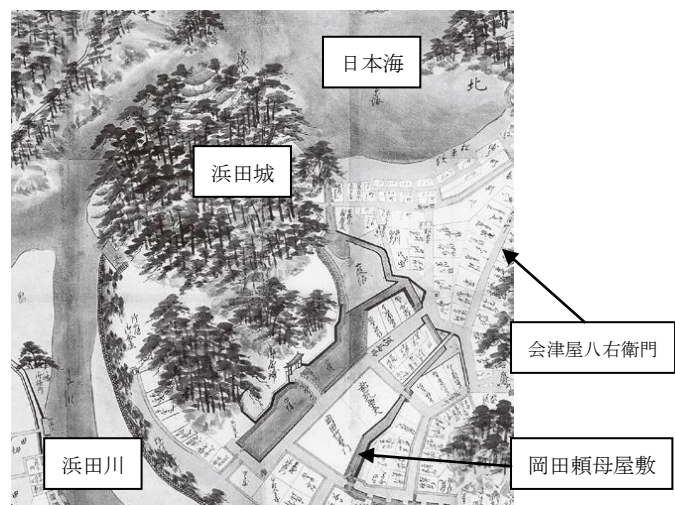
雨であった。すぐに止むかと思われた強い雨が、断続的にもう3日続いていた。田畑は広く冠水し、浜田城（現・島根県浜田市）のすぐそばを流れる浜田川は、満潮時に侵入する海水を押し戻すように、流れ下ってきた濁流がぶつかり、地響きを立て暴れ狂っていた。城の東側に海から真っ直ぐに切られた堀にも、四方八方から濁った水が押し寄せ、滝つぼに落ち込むように流れ落ちていた。天保5年（1834）、山陰浜田藩を含む裏日本では、長期の干ばつが続いたかと思うと、突然の低温と大雨が降るといふ気象がもう2年越しに続いており、ただでさえ耕地が少なく、厳しい運営を迫られていた浜田藩を抜き差しならない事態に追い込んでいた。だが、それは浜田藩に限ったことではなく、北関東から東北にかけて飢饉は猖獗を極めていた。隣の鳥取藩では、34万人程度であった人口が、1837年ころから1850年にかけて、29万人にまで減少している。5月に入ってからぞくぞくするような寒さが続き、田植えも終わったというのにヒョウが降り、霜がおりるありさまであった。100万人が餓死したといわれる天保の大飢饉である。だが山陰の小藩浜田藩にとって、これは踏んだり蹴つたりの始まりに過ぎなかった。

浜田藩（現島根県浜田市）は、元和5年（1619）、伊勢松坂藩より入封した古田重治により54,000石で開かれ、その後浅野氏、亀井氏、本田氏を経て、現在の松平氏に受け継がれ、この小説に登場する松平周防守康任（やすとう）はその3代目藩主である。康任はもともと松平分家の生まれであるが、浜田藩主・松平廉定に後継ぎが生まれず、養子となって浜田藩を継いだ人物である。父親は松平康道という人物であるが、江戸在住の旗本ではなかつただろうか。そのせいか、松平康任は極めて中央志向が強く、野心家で、幕府中枢に賄

賂を駆使するなどして、大阪城代、京都所司代を歴任し、山陰の小藩主でありながら江戸幕府の老中主座にまで上り詰めた。しかし、そもそも大赤字の藩財政の中、連日の接待、賂賂に加え江戸屋敷を三つも経営するなど無理な出費が日常となっており、浜田藩は慢性的赤字財政の立て直し策どころか、それを検討する余裕もない有様であった。

岡田頼母元善（おかだ・たのも・もとよし）は禄 3000 石の浜田藩国家老職であった。五十代でいったん隠居したが、あとを継いだ長子・元凱は男子と娘をもうけながら 38 歳で早世してしまい、頼母はやむなく齢六十の声を聴きつつ藩政に復帰していた。岡田頼母は本居宣長の門人として学問への造詣も深く、同時に詩歌のたしなみもあり、囲碁も有段の腕前であった。頼母の目には、浜田藩財政は完全に破たんしており、この上は幕府へ藩を返上し解散するより道はないとさえ思われた。藩の窮状は限界の生活苦にさらされる藩士だけでなく、藩内の主だった庄屋、商人たちにも広く認識されており、江戸末期の幕藩政治の典型であった。時は天保 4 年（1833）、折から日本は水野忠邦が主導する天保の改革の真っただ中であった。このころシーボルト事件が起こり、薩摩藩が借金 500 万両を踏み倒し、ブラームスやノーベルが生まれ、父島にアメリカ人が来訪し、そして天保の大飢饉がおこった。江戸時代の 3 大飢饉はほぼ 50 年おきに起きている。その原因は無論異常気象であるが、天明の大飢饉などは浅間山やアイスランドの火山噴火によるものと言われている。

石見・浜田城は、古代は島であっただろうと思われる海辺の丘の上に建てられた三樓の城で、背後は松原湾（日本海）、海を背にして右隣りは浜田川河口である。陸側の大手門（正門）には内堀をまたぐ橋がかかっている。城下町は武家屋敷、社地境内地、町屋敷を中心とした構成となっており、藩内には 600 戸ほどの民家があった。家禄三千石の国家老・岡田頼母の屋敷は、大手門を



出てすぐ正面の屋敷町の一角にあった。現在の浜田市は静かで美しい山陰の都市で、いかにも旅情をそそられる地方都市であるが、もし当時の浜田を空から見ると、見落としてしまいそうな小さな町であったに違いない。6万石といっても、内実はそれをかなり下回る小藩ではなかつたらうか。

浜田藩松原浦に住む船頭・会津屋八右衛門（本人は今津屋と称していたという研究もある）は、天保元年（1830）7月、松平越中守藩領である越後の村々の年貢米を、船で江戸へ運ぶ仕事を引き受けた。日本海を南下し、瀬戸内海を経由する航路である。八右衛門は翌年7月、無事にこの仕事を済ませると、そのまま江戸に滞在した。その目的は、浜田藩江戸屋敷勘定役・村井萩右衛門の長屋を訪れることであった。浜田町史には八右衛門の容貌について次のように記録がある。

『八右衛門は色浅黒く、威あって猛からず、うんと反張れば（背筋をまっすぐに伸ばすと）誰でもその威に圧され、下手に出れば滴る愛敬、眼を細くして笑えば女が惚れ、目を見張って笑えば男が惚れる人相』とある。またその身長は170 cm、体重67 kgで、読み書き算術ができたとある。この当時としてはかなり押し出しの立派な人物であった。

「これは八右衛門か。しばらくであった。このたびはご苦労なことであったの」

村井萩右衛門は如才なくねぎらいの言葉を述べた。浜田の有力者会津屋八右衛門が自分のことさら訪ねてきたことに、藩の経済に関係のある話を持ってきたと直感したからである。

「恐れ入りましてございます」

「ふむ、で、さっそくじゃが、今日はどういふ……」

「はい、お願いの儀がございまして、不躰を承知でお伺いいたしました」

「ほう、それは。で？……」

「村井さまは竹嶋という島をご存じでしょうか」

「ウム、名前だけはな。朝鮮の方角だと承知しておるが」

「はい、浜田よりほぼ真北に 90 里の海上にございます」

「なるほど、で、それがなにか……」

八右衛門は、浜田藩の窮状を救うため、冥加金（藩への献金）の大幅な増加を目指していることを告げ、そのためには商いの拡大が不可欠であること、商いを拡大する方途の一つとして竹嶋への渡海許可をもらいたいと熱心に説いた。八右衛門の話には説得力があった。村井萩右衛門は、話の内容を国家老岡田頼母に伝えることを約した。だが、村井萩右衛門は、これが浜田藩を揺るがす天保竹島事件に発展するとは夢にも思わなかった。

なお、ここでいう竹嶋（竹島）は、現在問題になっている竹島のことではなく、その隣の鬱陵島のことである。現在の竹島は、当時「松島」と呼ばれていた。

天保元年（1830）12月、浜田藩国家老・岡田頼母の屋敷に藩士数名が集まっていた。

「あちこち大変なことになっているらしいの」

七十歳になる浜田藩国家老・岡田頼母（おかだたのも）は家内の年寄役・松井図書と勘定方・橋本三兵衛を前にして聞くともなくつぶやいた。

「そのようでございます。しかしそうでなくとも我が藩はこの有様では」

松井図書が頼母の表情を探るように答えた。年寄役とは言っても、松井図書はまだ30代前半である。

「ご家老、今日は八右衛門の提案の件をはっきりさせてやりませぬと、間もなく船出と聞いております」

勘定方の橋本三兵衛が家老の意図をくむように思い詰めた表情で言った。

「うむ、江戸表から依頼が来ておるのはいくらであったかな」

「五百両ということですが、藩とは申せ、高々二百両でも整いませぬ。既に家臣の給金は4カ月滞ったままでござる。ご家老、もう一刻の猶予もありません。慢性の財政困窮に加え昨年からの不作で、今年もこのありさまでござる。領民だけでなく、家臣も困窮を極めて

おります。空っ腹で弁当もなく登城している者もおります。このようなときにご改革とかいうことで、荷止め、津止め、いったいお上は何を考えているのでしょうか」

若い松井図書は言いだすと止まらなかった。岡田頼母が右手を挙げてたしなめた。

「うむ、だがな、たかだか 6 万石の小藩を経営していただけならさほどのことはない。恐れ多いことだが、殿の過剰な出世志向のなせる技、それに直言できない我々家老職の責任じゃ。しかしここまで来てしまった以上、今更やめますとは言えんじやろう。もう一度八右衛門の話をよく聞いて、今日決めようではないか。こうなればもう背に腹は代えられぬ。ただし失敗した時はその責めは負わねばならぬ」

いざとなれば自分が責めを負う覚悟で頼母はきっぱりと言った。

「お客様がおいでになりました」

茶盆を持った十六歳になる孫娘の沙織に続いて八右衛門が案内されて現れた。沙織の父親、つまり岡田頼母の長男元凱は沙織がまだ幼いころ 38 歳で早世し、その長子・八十郎と長女・沙織を残していた。頼母は寡婦のヨリともども八十郎と沙織を引き取っていた。沙織はこのところ急に女らしくなり、色白のほっそりした体もどこか丸みを帯びて、化粧をさせると岡田頼母でさえホウと感心することがあった。沙織が現れると雰囲気はパッと明るくなる。頼母は、ふん、若い男が来るとなると着飾りおってと内心舌打ちをしながら、どうだ、うちの孫娘は美人だろうと、そわそわし始めた松井図書に自慢したい気持ちになった。頼母の妻、沙織にとっては祖母に当たる鍵子は、沙織をなめるように可愛がったが 7 年ほど前に他界し、岡田頼母は国家老という立場上の必要に迫られ後妻・満寿を迎えていた。沙織は父親について兄を失くし、祖母を亡くしていたが、朗らかな性格で後妻の満寿にもかわいがられていた。

「おいでなさいませ、粗茶でございます」

沙織はまるで舞うように男たちに茶果を配ると、華やかな光を振りまいて下がって行った。

浜田藩御用商人・会津屋八右衛門（やえもん・はちえもん）は、浜田城のすぐ東にある松原の廻船船頭で、自分が直接船頭として船に乗り込み松前（北海道）と商いを行っていた。

八右衛門地味な羽織に町人髷といういでたちであったが、35歳過ぎというその顔は潮焼けし、海の男らしい引き締まった体をしていた。岡田頼母と八右衛門は初対面ではなかったが、今日の八右衛門は正装しており、改まった話に臨む気持ちを表していた。

「しばらくでございました、ご家老様にはご機嫌……」

「いや、あらたまった挨拶はよそう。それよりかねてからの提案をもう一度整理して聞かせてくれぬか」

頼母は単刀直入に切り込んだ。

「はい、何かからお話しいたしましょう……」

「八右衛門、ほかならぬ竹嶋（くどいようだが現在の鬱陵島）の件じゃ」

松井図書が先を促した。

はい、八右衛門は考えをまとめるように一瞬黙ったが、吐き出すように話し始めた。

「わたくしが申し入れいたしましたのは、言ってみれば抜け荷でございます。竹島の物産を仕入れ、売りさばくことを手始めとして高麗やシナ、ルソン、ジャワまで手を広げてみたいと思っております」

八右衛門は大胆に核心に触れた。岡田頼母の目が光った。

「ご承知の通り、わたくしの家は代々直乗り船頭として松前と商いを行っておりますが、往路、復路に竹島の近くを通ります。最近はことさら近くを通ります。竹島はアワビをはじめとして魚介類が手つかずのうえ、良好な竹材、樹木も密生しております。また高麗やシナの船も頻繁に訪れており、それらの者どもから現地の品物を手に入れば、多くが稀観品でございます、江戸、大阪を中心に高値で売りさばくことができるでしょう。こちらの物産も無論高麗、シナに売りさばきます。そうやって商いを膨らませ、支那、ルソン、安南の物産を仕入れます」

「ふむ、それでどのような利益を見込んでおるか」

「ただいまの松前との商いなど高が知れております。コメ、干鰯、銑鉄、蠟など品物は決まっておりますし、津留め（船による商い禁止）になればそれも終わりでございます。一方、このたびの商いは規模も、品物も全く異なるだけでなく、おまけに竹島はすぐ近場でございます。船数を増やせば短期間で藩の入費も賄えるようになるはずで。品物は江戸、大阪、博多の商人がノドから手が出るほどほしがっているものばかりでございます。最初からというわけにはまいりませんが、おそらくひと航海で最大2万両ほどかと」

八右衛門はそこで話を切り反応を待った。皆がオウと声を上げた。

「して、それに見合うような船はあるか」

「はい、このたび江戸へ回航いたしました船は傷みが激しく、やむなく廃船といたしました。どのみち船体が小さく、平底でございますので外洋には向いておりません」

「なるほど、それで？」

「瀬戸内衆に頼んで、竜骨を持つ船を建造中でございます」

「ほう、それはどのくらいの船じゃな」

「積みしろ80石でございます」

「ふうむ、しかし、おぬし、これが露見すればどういうことになるか分かっておるか」

頼母が八右衛門の目を見つめながら言った。

「わかっております。ですが、どの道、このままでは多くのものが倒れてしまいます。私には他に手段はございません」

八右衛門は聞かれることを予測していたようにあっさりと答えた。

岡田頼母は一瞬黙った後重い口調で答えた。

「うむ、あい分かった。藩として表だって協力はできぬが、ここにいるものは一蓮托生じゃ。殿にも伝える。かくなる上はここにいる図書と三兵衛と緊密に協力して事に当たってもらいたい。何かあれば遠慮はいらぬ、いつでも訪ねてきてもらいたい。またやるからには確実に藩と領民の助けになるよう、存分に力を注いでくれ。あいにく、このような状態

で助けにはならぬかもしれぬが、船の建造費くらいは何とかしたいのう。藩がこのような
ぎまで、迷惑をかけるのう」

八右衛門は恐れ入りますと小声で答えた。

会津屋八右衛門が書いたという竹島に関する書状がある（森須和男氏による口語訳）。

「天保2年（1831）8月某日、村井荻右衛門様へ内存書を持参した。内存書には、『竹嶋のほか石見国海岸より北のほうに当たる海上7,80里ばかり隔てたところに松嶋（現在の竹島）と唱える小島があり、この松嶋竹嶋両島とも全くの空島と思われるので、そのまま置いておく事は残念でならない。草木を刈り出し、漁業もすれば私の徳用（利益）のみならず、莫大な国益となると見込まれる。周防守様への冥加銀を差出す額は試に渡海してみて歩合を取り極めることとし、両島への渡海願いを内諾していただくように』としたためた。

岡田様のお許しを頂いて渡海出来るように橋本三兵衛に頼んでおいたところ、正月18日、江戸詰村井荻右衛門様より私宛に書状が送られてきた。竹嶋は日出之地（日本）であると極めがたいので、渡海計画はやめるように、とのことであった。予想に反した返事なので、残念でならず、橋本三兵衛方にこの書状を持参して、再度岡田様にお許しをいただけるよう頼んでおいた。しばらくして、橋本三兵衛に様子を尋ねにいったところ、江戸表よりの伝言は、竹嶋はやめて松嶋へ渡海を試してみてもどうだろうか…というものだった。松嶋は小島で見込みがないので、江戸表には松嶋へと名目を残しておき、竹嶋へ渡海を試してみてもどうか」。

つまり、江戸表の藩主松平康任は鎖国令を順守し、竹島（鬱稜島）ではなく、わざとらしく隣の松島（現在の竹島）にしろと指示している。しかし松島は岩だらけの何も無い小島であり、藩主はそのことを承知していた。これは、竹島行きと密貿易を事実上承認していたということになる。時は明治維新のたった30年前である。薩摩が大々的に密貿易を行い、巨利をえていることは山陰の小藩にも伝わっていた。薩摩は500万両の借金を踏み倒し、禁制の密貿易をやりながら巨額の資金を蓄積し、明治維新から大正、昭和に至る政

治を牛耳るまでになる。正直者がバカを見ると誰もが思い始めていた。3年後に処刑されるまで、会津屋八右衛門と浜田藩は藩の救済のため密貿易を執行する。

韓国のソウルから真っすぐ300キロほど東へ向かった日本海に鬱陵島（うつりょう島・ウルン島、当時の竹嶋）があり、そこから南に約350キロ下ったところに浜田藩（島根県浜田市）がある。19世紀当時、鬱陵島は「竹島・竹嶋」と呼ばれていた。現在の竹島（独島）とは別物である。この当時竹嶋は「国外」であり、そこへ行くことは鎖国令に背く行為で、原則として死罪であった。浜田藩は今、国禁を犯しても藩を救う手立てを講じようとしていた。それは密貿易であり、その実行者として直乗り船頭の今津屋八右衛門に頼ろうとしていた。つまり藩をあげて国に背こうというのである。今の感覚で言えば、理解できる、無理もないということになるかもしれないが、当時の背景から言えば、本能寺の変と同じくらいの驚天動地のことかもしれない。だが高麗人が山陰に数回漂着し、その地の文物が知られると同時に、薩摩の大々的な抜け荷は浜田藩にも伝わっていた。長崎へポルトガル人がはじめて現れたのはこの時代より300年近く前のことである。

八右衛門の父清助は、当時としては破格の2400石（約240トン）の大型船「安房丸」を所有する藩の御用回船商人であった。しかしこの船は平底であるため荒天時の操作性が悪く、風で簡単に横滑りした。文政2年（1820）清助は藩の品物を満載し、大阪へ向かう途中、和歌山沖で嵐のため遭難した。船と荷物は沈没、清助は無人島に漂着したところをオランダ船に救助され、そのまま南洋の国々を回った後、長崎港で法度逃れのため海中に飛び込み逃げ帰ったという経験をしている。清助の死後、その妻は持てる財産のすべてを藩に寄贈し、藩と民心を感激させた。いっぽうの八右衛門も父親の汚名を返上すべく、できるだけ多くの運上金を納めるなど浜田藩のために様々な貢献をした。しかし当時の浜田藩は経済破たんの一歩手前で、八右衛門の事業も下降し、そのうえ幕府は天保の改革策の一環としてコメの積み出しを禁ずる「津留め」を発告した。八右衛門は自らも藩も一挙に救済す

る方策に迫られ、それには竹島を中心とする密貿易しかなかった。発覚すれば自分は間違いなく死罪になり、仲間やその家族も無事では済まないだろう。また、これだけ大規模な事業を秘匿することなど到底不可能であろう。しかしやらなければゆっくり餓えるだけであつた。会津屋八右衛門はこの時代の船頭としては珍しく学問を積んでおり、父親や母親の藩に対する貢献もあって、その若さにもかかわらず人望を集めていた。であればこそ浜田藩はこぞって八右衛門の提案に乗った。

八右衛門は岡田頼母の屋敷を出た。思わず空を見上げた。雨はやんでおり、かなたの雲月山にかけて厚く雲が垂れこんでいた。ぬかるみを避けながら、昨日とは既に違う運命に歩み出そうとしている自分に、お前は本当にその覚悟があるかと問いかけた。妻や息子、親族、八右衛門に頼っている多くの水夫たちの顔が浮かんだ。だが答えはわかっていた。覚悟があつてもなくても避けては通れない道であつた。

サエは黙って夫の帰りを迎えた。着替えを手伝いながら尋ねた。

「お茶ですか、それともお酒・・・」

「いや、茶にしておこう。皆が来るから応接の準備をしてくれ」

八右衛門はサエとの夫婦関係が早くも別の段階に入りつつあることを感じた。もし計画が発覚すれば来月にも自分は江戸へ送られ二度と戻ることはできないであろう。八右衛門は頑なにサエに計画を秘しているつもりでいた。知らなければ命までは取られないだろう。そうでなくとも、外洋に行けばどんな危険が待ち受けているかわからない。ひょっとして自分は南洋のどこかで果てるかもしれない。サエとの別れは目前に迫っていた。だがサエには夫が何をやろうとしているかくらいはすでに分かっていた。地元長浜の有力商家若松屋の娘であつたサエとても窮屈な暮らしが楽しいわけではなかったが、夫が藩のために命を張る理由が納得できなかった。しかし船頭は一度言い出したら聞かない。それは水夫たちの命を預かり、いつもギリギリの決定をしている者の習性であつた。

「みんな聞いてくれ。今日ご家老から正式に返事があった。決めた通り早速行こう。船の建造費も融通いただけることとなった。藩にはなけなしの金だ。仕入れ資金の多くは銀主（金主＝出資者）頼みということになるが、わしはこれから銀主探しに上方詣でだ」

八右衛門が発言した。船頭の十助がホウと声をあげ、無言の者もいよいよかという思いを噛みしめるようにそわそわと体をゆすった。

「こうなれば一刻も早く出かけたと思うが、ご家老からばれた時の覚悟はあるかと聞かれた。わしはもちろん覚悟しているが、覚悟があってもなくてもやらなければならない。覚悟があるというより、覚悟しなければならない。ここにいるものはわしと同じだと思う、そうでないものは遠慮はいらない、出してもらおう」

全員が一瞬黙りこんだ。

「わしらはもう何度も会合を重ねておる。そんなことは始めから分かっていることだ」
船主の新兵衛が全員を見渡しながらか言った。

「怖くないわけじゃないが心はもう決まっている。それはもういい、さっそく取り掛かるうじゃないか」

八右衛門の船頭である半右衛門が締めくくるように発言した。

八右衛門が次にしなければならないことは仕入れ資金の調達であった。浜田藩は建前から実質経済からも入用金を提供することができず、八右衛門は浜田表で銀主（出資者）を探ることになった。しかし話を半分隠しながらの説得であったため協力者は現れず、八右衛門は橋元三兵衛に大阪屋敷の嶋崎梅五郎の協力を取り付けるよう依頼した。そうやって次第に話が広がる中、2月の半ばになって中橋町の中國屋庄助が大阪屋敷を訪ねてきた。二人は見知った仲であった。中國屋庄助は40代半ばであった。

「御足労じゃったが、ここにおける会津八右衛門とは既知の仲であるとか」

嶋崎梅五郎がそつなく取り持った。

中國屋庄助は、藩の許可を得て竹嶋貿易を行う、については出資してくれないかという八右

衛門の話に必ずしも納得していない様子であったが、自分の資力だけでは賄いきれないからと、翌日播磨屋藤三郎を伴って再び大阪屋敷に現れた。藤三郎は産物売りさばきの権利については強い興味を示していたが、渡海手続きについて心配しており、交渉は決裂しかけた。そこへ嶋崎梅五郎が現れた。

「ちょっと所要があつての、済まなんだ。兩名とも心配はもつともであるが、この件は藩が全面的に後押ししており、渡海の件については藩主（老中首座）を通じ万全の手続きを踏んでおる。どうかその点は心配しないでもらいたい」

何といても浜田藩主の松平康任は幕府老中首座を務める大物である。庄助も藤三郎もようやく納得し、庄助は銀一貫目（約 100 両程度か）藤三郎は船の建造を請け合つた。このあと和泉屋半三郎、大黒屋定七、淡路屋善兵などの協力者が現れ、計画は急速に進み始めた。

日朝間で、鬱陵島（ここでいう竹島・竹嶋）がどちらの所属かという問題が表面化したのは 17 世紀初めである。それまで、両国の漁師が勝手放題に漁を行っていたが、17 世紀初め、幕府は米子の漁師に正式な渡航許可を発行した。その後、鬱陵島で漁をしていた朝鮮人 2 名が捕縛され、江戸へ送られるが、そこに李氏朝鮮からのクレームが入り、江戸幕府は鳥取藩に対し、いつごろから鬱陵島を自国領として認識しているかなどの問い合わせを行い、その結果を受け、同島を日本領ではない、したがって渡航禁止と認定している。このあたり、今の韓国に見習ってほしいものである。

上記の繰り返しになるが、この時代をさかのぼること 200 年まえの 1618 年に大谷甚吉という商人が日本海で遭難し、竹嶋（鬱陵島）に漂着した。そこでは朝鮮の漁師が豊富な魚介類を採っており、帰着後甚吉は朝鮮人漁師を駆逐し、自身の竹嶋での漁労を許可するよう幕府に申し入れた。幕府は対馬藩を通じ調査を行ったが、日本の領土であるという証拠が見つからず、同島への渡航を禁じている。この時に竹嶋（鬱陵島）は幕府により鎖国の対

象とされ、日本は自ら領有権を放棄した。これは現代において問題になっている竹島（独島）とは別で鬱陵島のことである。韓国は竹島を自国領土とし、国際裁判にも応じず、軍まで駐屯させている。大統領が竹島に行き、そこらのアンちゃんのような無様なことを平気でやるさもしい国柄である。竹島はどの方角から議論しても日本領土である。一方鬱陵島はいかにも朝鮮半島のすぐそばであり、これを日本領とすることは地理的にも歴史的にも無理があるように思われる。日本の決定は極めてフェアで理にかなったものに思われる。

さて船である。古川薫の小説ではかなり大型の「会清丸」で南洋航海を行ったとなっており、一方、島根県史では八右衛門自身が80石の「神東丸」であったと書いている。張本人の言うことのほうを取るべきなのだが、そうすると少しおかしい点が出てくる。

1. 神東丸は、80石というとせいぜい12～13トンの船である。これに10数名が乗り組み、水や食料などの底荷を積み、長期の遠洋航海を行い、さらに現地の物産を積み帰るようなことができるものだろうか。また、おそらく神東丸は竜骨（船首から船尾まで通った背骨のような船底の梁）を持っていたのであろうが、ちょっと嵩のはる貨物になると積み込めなかったのではないだろうか。
2. いっぽう、このような小舟であるので、八右衛門は実際には南洋にはいかず、竹嶋で中継貿易を行っただけという説もある。だが中継貿易であれば、よほどシナや朝鮮と密に連絡を取っていなければ、こんな小舟でたまに竹嶋に行っても大きな商売はまですできない。このことから、やはり八右衛門は言われているように比較的大きな船で南洋に行ったと考えざるをえない。乗組員が真っ黒に日焼けしていたことの説明もこれならつく。また、80石というのは現代の総トン数などという概念とは少し異なり、80石のコメが積めるかどうかという概念であり、大きな船でもカーゴスペースが小さければ80石である。神東丸は案外大きな船であったのかもしれない。
3. 一方で、古川薫がその小説に用いた「会清丸」という船名は、たとえば島根県史など

に一切出てこない。だが古川薫という作家は時代考証に比較的うるさい作家である。

勝手に創作したとはどうしても思えない。

4. 「新東丸 80 石」という八右衛門の陳述書は、八右衛門自身が書いたものではなく、裁判における口述筆記である。この裁判では極力南洋行きことは触れられていない。奉行所が意図的にその部分を削除した感さえある。したがって、この小説では両者の中間をとり、竜骨を持つ比較的大型の新造船「神東丸」としたい。もし会清丸という船名が古川薫の創作であるとすれば、それをここで用いるわけにはいかない。

八右衛門が乗る大型の神東丸は真ん中に一本マストをもつ木造船である。神東丸はこの当時の船としては珍しく法度違反の竜骨を備えた新造船で、喫水が深く、外洋で横風を受けにくい（横滑りしにくい）構造になっていた。また、実際には操作性を高めるため数枚の帆が張れるような仕組みになっていたという。これも法度違反である。北前船は小さなものとはかく、神東丸くらいのサイズとなると寝起きのための居住区が作られている。神東丸には航海要員が 8 名、漁師をはじめとする水夫 10 名が乗っていた。これらは、橋本三兵衛と八右衛門が瀬戸内海小豆島の船頭平右衛門に依頼して集めた熟練者であった。遠く離れた場所から人員を集めたことについて、歴史書には機密保持のためとあるが、そうであるとすればいかにも杜撰である。機密保持ということをあくまで軽く考えていた、あるいは、「覚悟がある」ということを前提にしすぎていたのではないだろうか。三衛門と八右衛門はその後大阪へ向かい、日本刀や反物、工芸品、雑貨など、貿易のための商材を買い集めた。

天保 4 年 6 月 15 日、神東丸は浜田を出発した。島根県誌によれば、乗り組みは小豆島の水夫を除けば金主の淡路屋善兵衛、水主の重助、新兵衛、久米蔵、音五郎、安吉、新作の 8 名であった。松原浦を出ると八右衛門は帆をいっぱい張った。神東丸は折からの東風を受け、甲板上の煩惱を吹き飛ばしながら矢のような速度で走り始めた。天候は曇りで海

は多少荒れていたが追い風で、船の面にある長い水きりに時々飛沫が当たる程度であった。水平線には雲の切れ目から明るい空が見えていた。八右衛門の周囲から陸上のあらゆるしがらみが吹き飛んで行った。船が陸を離れ速度を上げて走り始めるとき、顔に当たる潮風が八右衛門は好きであった。だがいくらかも行かないうちに天候は急激に悪化し、風向きが北に代わると、必死の操船にもかかわらず船は見島（山口県青海島の真北100km）方向へと流され始めた。やむをえず八右衛門は船を海岸いっぱいまで近づけ、ゆっくり東へ進む方法をとった。苦心惨憺の末、船は隠岐の島の福浦へ入港し、風を待つこととなった。八右衛門は事情を記した手紙を浜田藩へ送った。天候はなかなか回復せず、無為に日々が過ぎていった。浜田を出発して1カ月後の7月17日、船は帆をいっぱい張って隠岐福浦を出発した。快晴であった。神東丸は順風を満帆に受ければ1時間に約10キロメートルを走る。24時間では240キロ、鬱陵島まで400キロ弱程度の距離であれば最短では2日弱になってしまう計算である。実際には4日後の7月21日、神東丸は竹嶋に到着した。竹嶋（鬱陵島）はもともと火山島で、この時代より昔には朝鮮の漁師や倭寇が住んでいた。つまり人が住める島である。この島は隠岐ノ島の上島とよく似たデコボコの円形をしており、わずかに小さいくらいである。島は最大900mの高さがあり、登れば東南東に現代の竹嶋が見えるとか、見えないとか言われている。神東丸は風波を避けて島を回り込み、大陸側の入り江に投錨した。

「もうついてしまった、早いもう」

十助が感嘆の声をあげた。神東丸はそのキール（竜骨）のおかげで直進性に優れ、操船が楽であった。来るべき洋行にもこの船なら大丈夫と全員が自信を持った。入江はゴツゴツとした岩場で、かなりの深さがあるにもかかわらず透明な水を通して海底が見えた。入江の奥には朝鮮のものと思われる小型の漁船が1艘浮かんでいた。神東丸は小船を下し、朝鮮語を理解するものを含めた10名ほどが岸へ向かって漕ぎだした。朝鮮の漁師たちは貝類やタコを取っていた。八右衛門は彼らを船へ招き、酒を与え情報を仕入れた。日本の珍しい産物を与えると彼らは目を見張り、日本刀をみるとこれはいくらかと尋ねた。八右衛

門は朝鮮の産物をいろいろ挙げ、次回それらを買取することを約した。一方で、水夫や人夫は島へ上がり、ケヤキ、桐などの大木を伐採し、朝鮮ニンジンの採集も行った。島には大量のトドや大きな鳥（アホウドリか）がおり、それぞれ一匹ずつを捕獲した。神東丸は20日にわたり竹島に滞船し、ついで八右衛門は島を何回も周回し地図を作った。この地図は残っていないらしいが、それをそのまま写したものが現存しており、それによると岩礁の位置までも極めて正確であったらしい。なお、この最初の航海では帰路悪天候にたたられ、積載した材木の大半を投棄している。新造船であり、積み付けなど不慣れがあったのかもしれない。神東丸は知られているだけでも3回竹島を往復している。これが本当だとすれば、最初の渡海から捕縛されるまでの3年間に行った航海としては少なすぎ、やはり伝えられているように南洋航海を行ったといえることができる。

朝鮮人漁師との物々交換による貿易は、最初あまりうま味がなく、アワビでは大した売り上げにはならず、入手した朝鮮ニンジンも品質がもう一つであった。落胆して脱落するメンバーも出た。だが、天保3年、八右衛門はいよいよ南洋貿易に乗り出した。船は台湾、中国、フィリピン、安南（現在のベトナムを中心とする地域）を回り、珍奇な物産を山積みして帰るようになり、大都市の商人は浜田からの商品を心待ちにするようになった。この当時外来の商品としては絹製品・綿織物・毛織物を中心とした中国商品、鮫皮・象牙・胡椒・水牛の角・鉛、薬などの東南アジア商品、砂糖・皮革・鉛・香料・薬種などである。いずれも国内的には入手しにくく、大都市の商人相手に大きな市場が期待できた。

南洋貿易は大いに利益を上げ、八右衛門の藩に対する献金も増えていった。半年に及ぶ航海を終え神東丸が入港するとき、港には大勢の女子供が集まり歓声を上げるようになった。しかし、守秘工作などほとんどなされていない状態で長続きするはずがない。急激に成長する商売を滞らせないためには先行投資の仕入れ資金調達が不可欠であり、それを行う中で話は広がり、浜田藩の抜け荷はほぼ公然の秘密となって行った。浜田城下では明らかに

景気の回復が見られ、農民の顔にも明るさが戻ってきた。しかし岡田頼母を中心にした浜田藩の重臣は、藩の取りつぶしさえ招きかねない危険と、外国貿易がもたらす貴重な資金との間で苦悩していた。

岡田頼母は、将来の心配をほとんどしていないように見える若い家臣の笑い声を聞くたびに、これは自分ひとりが責任をとるくらいでは済まない事態に発展してしまったことを悟った。城下の商人の中には、黒檀や紫檀をあらかじめ注文する者まで現れ、女子供はそれを井戸端会議に種にすることが普通のこととなった。一方の八右衛門は、それを全く意に介していないようで、頼母は腹をくくるとはこういうことかと心配ばかりしている自分の老いを思い知らされることがあった。しかし八右衛門にも苦悩はあった。八右衛門の次男兼八郎は、天保5年8月、八右衛門が航海中に病没した。帰国後八右衛門が見ることができたのは「賽雲」という戒名が書かれた息子の位牌と物言いたげな妻の沈黙であった。

間宮海峡に名を残し、蝦夷地・樺太探検で知られる間宮林蔵は、この時すでに50代である。これだけの大事業を成し遂げた人物であるから軽はずみな評価はできないが、その人間性だけをみると頑固、狷介であったように思われる。でなければ、あれだけの事業をなしえなかったのではないだろうか。間宮林蔵はもともと農民の出身であり、武士としては屈折した人間性を持っていたとしても不思議はない。林蔵は薩摩藩の抜け荷を探るため、水野越前守の命を受け俳諧師の姿で山陰を南下中であった。老中首座である浜田藩主・松平康任（江戸在住）と水野越前は火花を散らす間柄で、水野越前は松平康任の失脚を狙っていた。間宮林蔵はしかし、特に意図せずに浜田藩に立ち寄ったようである。浜田町史には、そこで林蔵が珍しい「木」を見つけ、この木はどこで手に入れたかと店の主人に聞いたのが始まりと書いている。しかし古川薫や吉村昭は木ではなく、ヤシの実だと書いている。もちろん木であるはずがない、ヤシの実である。林蔵は港を訪れ、そこに何か不相応のにぎわいを感じた。またヤシの実を持ち帰る船員の顔が異常に日焼けしているという話

を聞き込み、確認した。林蔵はプロの隠密である。そこで何らか違法な貿易が、それも南洋と行われていることをかぎつけた。林蔵はひそかに調査を行うと3日ほどで浜田を離れ、そのまま目的地薩摩へ向かった。

江戸幕府の水野越前守忠邦も松平康任と同じく、老中になるためあらゆる工作を行った人物である。唐津藩主からわざわざ貧乏な浜松藩主となり、なりふり構わぬ工作を行って老中まで成り上がっているが、そのツケはすべて家臣と領民に回している。つまりこの二人は、実によく似た成り上がりものである。その行跡をみると双方とも極めて自己顕示欲の強い人間で、最後は失脚し、裸同然で左遷されている。また水野忠邦の部下である鳥居耀蔵も最後はやはり水野により職をはく奪され追放されている。しかし彼らが無能であったのか、その政策が間違っていたのかは難しい判断である。そもそも江戸幕府は無能力者と汚職者の集まりであり、将軍家斉にして妾に狂い50人を超す子供をこさえている。そのため、大奥は異常な権威を持つこととなり、その膨大な維持費も国政を誤らせた一因となっている。水野忠邦は人間性の問題はあったかもしれないが、腐りきった体制を何とか立て直そうとしたことは間違いない。それは鳥居耀蔵も同様であり、よく言われるような「妖怪」とはほど遠い人間であったようである。その中で、大坂町奉行を務めていたのが矢部駿河守定謙である。矢部定謙は極めて正義感の強い人間で、優秀な能吏であるが、反面物事を単純に割り切る性格であった。しかしそれはここでは重要ではない。とにかく矢部は職務を忠実、公正、厳格にこなす奉行であった。

間宮林蔵は薩摩から舞い戻ると矢部を訪ね、浜田藩に抜け荷の可能性のあることを報告した。矢部は驚愕し、早速隠密を浜田へ送ると言明した。今の人間なら、せっかくうまくいきかけているものをなぜそんなことをするんだと憤るかもしれないが、鎖国は幕府の大方針である。それを破ることは今でいえば北朝鮮貿易と同じである。しかし鎖国を馬鹿馬鹿しいと思っていた人間はかなりいたようである。例えば長崎であり薩摩である。隣の毛利

藩でも密貿易をやっていた。矢部の指示により多くの隠密が浜田藩を目指した。

「気のせいかもしれぬが、何かおかしい。林蔵なるものが去ってからかなりの時間が経つにも拘わらずお上から問い合わせの一つも来ぬ。林蔵は藩内あちこちで聞きまわっていたそうではないか」

岡田頼母が橋本三兵衛及び松本図書を前にして言った。その隣には大谷作兵衛、三沢五郎左衛門、村中庄右衛門が控えていた。

「ご家老、林蔵は大阪へ戻ったそうのござる。そうなれば奉行への報告はなされたものと思わなければなりません。しかし林蔵も確たる証拠をつかまぬまま当地を離れたとなれば、事の真偽を探るため隠密が派遣されることでしょう。彼らを大阪に戻してなりません」

松井図書が陰しい表情で言った。後ろで大谷作兵衛が大きく頷いた。

「うむ、覚悟の上の抜け荷であるが、ここまで来ると藩の取りつぶしを心配せねばならぬ事態に至った。あの仙石問題さえなければ何とかなっただかもしれぬが」

岡田頼母がすっかりしなびてしまった体を折って愚痴を言った。74歳を超えた岡田頼母は気力、体力の衰えを痛感していた。そこへ、主君の康任が問題を引き起こし、抜け荷問題がなくても藩の存続が危ぶまれる事態となっていた。

岡田頼母は、幕府が浜田藩をどう見ているかを知る必要に迫られ、天保6年（1835）7月、囲碁大会を開催するという名目で江戸藩邸へ向かい、主君の松平康任と面会した。

「秋斎（岡田頼母のこと）、国元はどうじゃ、こちらは越前（水野越前守忠邦）が密かに嗅ぎまわっておるということだが」

藩主康任はやや面曇れした顔を苦々しくゆがめた。

「越前殿には願ってもないことございましょうな。殿を陥れ、藩を取り潰す、あとは自分の天下ということござろう。仙石騒動はいわば言いがかり、殿には何の落ち度もございませぬ。しかし相手は何が何でも殿の責任と言ひ募ってまいることございましょう。」

しかし、心配ばかりしていても仕方がございませぬ。城内の様子について何か動きがあるやなど殿にお聞きいたしたく、参上仕った次第で」

「ウム、それがな、表面上は何事もなくてのう、あの若造めが」

「それはごさいますまい。必ず仕掛けてまいるでしょう。ただし、今のところこれという手がかりがないというところかと。殿にはくれぐれも相手に餌を与えるようなことをなさいませんよう」

「言うまでもないことじゃ。それより国元はどうじゃ」

「はい、間宮林蔵なるものがいろいろ調べて帰ったそうでございます。あれからかなりの時間がたったにもかかわらず何の沙汰もなし、手前が参りましたのは江戸表で何か動きがあるかを探るためでございます」

岡田頼母は何事もなかったかのように囲碁会に出席し、安井仙角と対戦した。結果は頼母の負けであった。この後、藩主の松平康任は致命的なミスをおかす。

仙石騒動は、但馬・出石藩（兵庫県）において天保6年（1835）まで続いた仙石一門のお家騒動である。藩主である仙石政美（まさよし）が若くして死亡すると、家老・仙石左京は藩政を牛耳ろうと画策し、同じ家老職である仙石造酒（みき）と激しく対立する。前者左京は徴税強化による強引な積極策で藩の経済を立て直そうとし、後者造酒は質素、儉約による消極策を主張した。藩主政美は仙石左京の積極策を採るが、領民から強い反発を受け、やむなく仙石造酒を復権させた。しかし今度は造酒派内部で対立が引き起こり、その結果、再び仙石左京が藩のかじ取りを行うことになる。だが左京の強引なインフレ抑制策はうまくいかず、出石藩内部の不満は限界に近づいて行った。

そういう中、江戸在勤の旧造酒派である荒木玄番の不正が発覚し、左京は目の上のたんこぶとばかり荒木玄番を罷免すると、息子小太郎の嫁を幕府の実力者の血筋からもらい受け自分の立場を補強する工作を行った。その嫁がこの小説の主人公の一人である浜田藩主・

松平康任の姪であった。そうなる造酒派は面白くない。仙石騒動を詳しく描くことはこの小説の趣意ではないが、両派閥は互いに誹謗中傷合戦を繰り返すうち、藩を追放された河野瀬兵衛というものが藩主夫人に左京の非を述べたてた書面を送り、夫人はヒステリーを起こし、左京を呼びつけ鋭く面罵した。面目を失った仙石左京は、生野銀山という天領で幕府の許可を得ることなく河野瀬兵衛を捕縛してしまった。天領での勝手な逮捕は許されない。この時素直に非を認め幕府に謝罪すればよかったのかもしれないが、左京は老中首座である松平康任にもみ消し工作を依頼し、康任も賄賂で動いてしまった。これが発覚し、仙石左京は死刑獄門、松平康任は隠居を命じられてしまう。浜田藩主は息子の康爵が継いだが、すぐ棚倉藩に飛ばされてしまい、ここに浜田松平家は終わりを迎えることになる。仙石騒動と竹島事件は、山陰の小藩である浜田藩の息の根を止めてしまう結果となる。

これは出石藩政の建て直しを契機とした文字通り権力争いであるが、国許も江戸表も騒ぎすぎて、その内容が天下に知られる羽目になった。大騒動の結果、仙石左京は斬首獄門となり、姻戚関係を結んでいた浜田藩主松平康任は、その失脚を狙う水野忠邦の格好の餌食となってしまった。いつの世も役人の世界は油断がならない。康任はその立場を利用して事件のもみ消しを図ったが、取り調べ役の奉行・川路聖謨は圧力に負けず徹底した調査を行った。事件の全貌が明らかになり、川路の報告を受けた寺社奉行・脇坂安薫はご機嫌取りも兼ねて、恐れながらと水野忠邦へ報告した。抜け荷の発覚をいつかいつかと心配していた浜田藩に、思いもかけぬ別の不祥事が降りかかり、松平康任は隠居を余儀なくされ、その子供の松平康爵が後を継いだが、これもすぐ奥州棚倉に飛ばされてしまった。

岡田頼母は体力、気力の上で当事者能力をなくしつつあることを自覚しつつあると同時に、自分の孫ほどの松井図書という若者が、自分よりはるかに腹が据わっていることに驚いていた。人間というのは、その知力や人間的なパワーで年齢差などは帳消しにしてしまう場合がある。若い図書はかなり厳しいことになるかと冷静に事態を見ていたが死にたいとは思

っていなかった。二地も三地もいかないような事態に追い込んだのはほかならぬ幕府の政策である。いざとなれば出るところへ出て、堂々と意見を述べ幕府の決定を覆すつもりでいた。だがそれが果たして通るだろうかという恐れも抱いていた。松井図書には答えは一つしかなかった。隠密を大阪へ帰してはならない。図書は鋭い目つきで後ろに控える3人を振り返った。

天保6年春、浜田城の北1里にある下府の宿に30代なかばとみられる商人が立ち寄った。男は浜田城下への道を尋ね、茶をいっぱい注文するとそそくさと立ち去った。しかし店の主人は男の面ずれの跡や竹刀ダコを見逃さなかった。男は大阪奉行所直属の隠密・吉見宗助であった。宗助が最初の峠に差し掛かった時、後ろからバタバタと追いかけてくる者があった。3人の若い武士であった。宗助は待ち受けられていたことを悟った。

「荷物の中身を見せてもらおうか」

武士の一人が息を喘がせながら言った。他の二人は刀に手をかけ、強い殺気を放っていた。

「あ、はい、ただいま」

宗助はとぼけようとしたが、相手が放つ殺気はそれを許さなかった。宗助は風呂敷の結び目を緩めるふりをしながら脇差の位置を直した。宗助はこういう修羅場を何度も経験していた。相手が何人であっても臆したらそれで終わりである。宗助がジロリと3人を見回すと同時にその全身から殺気がほとばしった。左手の武士が鋭い叫び声をあげながら切りかかってきた。宗助は一步踏み出しながら瞬間右へ体を沈め、脇差を両手で握ると、力いっぱい抜き打ち水平に払った。その武士は実戦の経験がないようであった。腹部をまともに切り割られ、頭から地面に突っ込んだ。宗助は止まらずにそのまま進み、右手の武士に向かった。その武士は大上段から宗助を切り下ろした。宗助は体をひねり背中の荷物を切らせると踏みとどまり、右から左上へ切り上げた。脇差はその武士の左胸から入り、左腕をおよそ切断した。残る一人は、宗助のすさまじい刀さばきに唾然として立ちすくんでいた。

宗助はすばやく転がりながら道に落ちている相手の刀を拾い上げると青眼に構えた。その若い武士はすっかり戦意をなくしていた。しかし見逃すわけにはいかなかった。宗助は力なく刀を構える相手に突進し、相手の刀を吹き飛ばすと、から竹割りに切り下げた。その若い武士は血を噴出させながら声も立てずに崩れ落ちた。宗助は死体を森の中に隠すと、すぐ近場の川で全身の返り血を洗い流し、急いでその場を立ち去った。

港の揚げ荷棧橋のすぐ外に年寄の乞食が現れ、物乞いをするようになった。やせ細り、歯が抜け、しわだらけのその乞食は、やはり大阪奉行直属の半村五兵衛であった。五兵衛は夏の間そこに座り続け、あの乞食は意外とカネを持っていると噂が立ち始めた秋口にはいなくなった。3名の藩士を殺された浜田藩は、躍起になって隠密の行方を捜したがついにわからなかった。津和野方向から来たという商人が、言葉のなまりが違うとつけ狙われ、最後は藩士に切られたが、隠密であるという証拠は上がらなかった。藩内に疑心暗鬼が広がり、無関係な土地のものまで引っ張ってこられるありさまであった。

会津八右衛門は全く平静に振舞っていたが、隠密潜入の話は三兵衛の口から伝わっていた。公儀の浜田藩に対する疑念は明らかであり、その時が来つつあることを八右衛門は悟った。逃げるわけにはいかなかった。逃げても行く先はなく、家族や仲間に責めが行くであろう。そうなれば営々と父の代から築いてきた店の栄光も何もなくなる。八右衛門は息子の竹次郎を大阪の商家へ養子に出し、嫌がる妻のサエを離縁すると実母の幾久の住居へと引っ越した。伝えられるところでは、サエは離縁後も八右衛門の母親とともに八右衛門を支えたとあるが詳細は不明である。浜田にいられるのはあと何日であろうか、自分は最後まで自分らしくいられるであろうか。

天保7年5月、大阪から100名を超す捕り手が浜田藩に入った。城下は騒然となった。八右衛門も三兵衛もそれぞれの場所で黙って縄につき、かごで大阪に送られた。大阪で吟

味が行われ、ついで江戸に護送された。大阪、江戸の商人も何人かが捉えられ、総逮捕者数は20名ほどに上った。そもそも隠すつもりのない彼らの口から浜田藩抜け荷の実態が明らかになっていった。八右衛門は、すべて隠さず申し述べ処刑された。橋本三兵衛は自分の考えを申し述べたがもちろん容れられるはずもなく、最後に斬首された。捕縛から半年、12月23日であった。下された判決は浜田藩士に関する限り次のようなものであった。

氏名	役職等	年齢	裁判結果
松平下野守康任	浜田藩主	56歳	不束につき永蟄居
松平周防守康爵	藩主長子(やすたか)	文化7年6月6日	お目通り差扣格
松平亘	江戸家老 600石	53歳	不埒につき役儀取放押し込め
大谷作兵衛	江戸勘定頭 250石	63歳	不埒につき押し込め
村井萩右衛門	江戸勘定役	61歳	不埒につき押し込め
三沢五郎右衛門通晴	江戸詰め元方役	57歳	不埒につき押し込め
嶋崎梅五郎	無役(大阪屋敷)		不埒につき押し込め
岡田頼母(秋斎)元善	国家老 3000石	74歳	6月28日自殺
岡田八十郎	頼母孫	13歳	
杉浦仁右衛門	岡田頼母付 50石		不埒につき叱り置き
橋本三兵衛	岡田頼母召仕	59歳	不届きにつき死罪
松井図書元良	年寄役 400石	34歳	6月29日自殺
南又右衛門	松井図書親類		不束につき叱り置き
谷口勘兵衛	家老 1000石	69歳	不埒につき押し込め
杉村但馬	宗対馬守家来 家老		役儀取方押し込め

岡田頼母邸

「八右衛門には気の毒な結果となった。三兵衛もわしの家中じゃからの、皆藩の犠牲となって死んでいった。詮議の呼び出しを受けておるが、今更わしが生き恥を曝すわけにもいかぬわい。だがおぬしは若い、これからの人間じゃ。立派に言い抜け、わしら亡き後をしっかりと頼まれてくれよ」。

既に白装束に着替えた岡田頼母は肩を落としている松井図書を諭すように言った。図所は何も言わず深く平伏すると去って行った。足早に立ち去る図書を沙織が呆然と見送った。岡田頼母は縁側を見つめた。陽が落ち、今では薄暗くなった庭の中で、部屋の明かりに立木がボウと照らされていた。離れでヨリと沙織が息をひそめていた。頼母は右手で小刀を取ると、北向きに座り直し、背筋をまっすぐにのぼし、左手でゆっくり前を広げた。松井図書も翌朝30歳を前にした若さで切腹自殺した。両名は証拠隠滅のため浜田藩により暗殺されたという説もあるが、これは全くの虚偽である。なぜなら岡田頼母と松井図書の死体検案書が残っている。

岡田秋斎

- 居間縁屋敷
- 死骸頭西向き、但し諸肌脱ぎ
- 腹少し右へ寄って掻き切り傷 1か所
- 咽喉にかかり傷一か所 長さ4寸5分、深さ1寸7分
- 鼻孔より出血

着類

- 紹羽織壺ツ火打ち三所紋、白帷子
- 襦袢白さらし
- 帯御納戸関東織、浅黄小紋繕い衣下敷き

- 脇差死骸脇に抜き身鞘とも有之、長さ9寸5分

松井図書

- 表座敷
- 死骸頭北向き顔東向き
- 両手握り
- 咽喉へかかり左へより一か所、長さ3寸7分、深さ1寸4分
- へそ脇左方に搔き傷1か所、長さ1寸2分、深さ1分

着類

- 白縮帷子
- 帯緋縮緬丸くけ、下帯白木綿
- 毛氈を敷く
- 懐剣7寸5分銘不明、ただし銘不分由紙に而

介錯人のいない切腹であるので、両名ともまず腹を切り、のどの血脈を切るにより自殺している。断じて暗殺ではない。

男たちはいなくなり、女だけが残された。幕府はそれ以上の追及を行わなかった。幕府内部には、そもそもそこまでやるのは行きすぎだという意見があり、それは個人的な意趣晴らしに浜田藩の抜け荷をしつこく追及する水野越前に対する批判でもあった。処刑された会津屋八右衛門と橋本三兵衛、切腹した岡田頼母と松井図書、彼らはすべて地元の人々から英雄としてあがめられ、後年記念碑が建てられている。浜田藩はこの30年後、明治維新につながる長州戦争に巻き込まれ、藩主・松平武聰は自ら城を焼いて最後まで長州と戦い、徳川幕府への忠誠を貫いている。水野越前は後年失脚する。

浜田騒動は、言ってみれば金に困った浜田藩が、一部の英雄的人物を中心に密貿易に走り、

当然のようにばれてしまったという事件である。発覚すれば死罪が待ち受けていることは関係者にはわかっていたはずで、覚悟の上ということかもしれないが、おそらく現実が先走ってしまい、その時はその時というような迂闊な樂觀があったのではないだろうか。同じことをもっと大規模に行った薩摩に比べると、浜田藩の場合バカ正直でたわいない。だが当時の時代背景を考えると、山陰の小藩ができることと言えばこのくらいしかなかったのではないだろうか。

藩主の松平康任は自己の虚栄のために藩全体を落とすめたわけであるが、当時としてはこのような名誉（老中首座）はどの藩でも尊ばれた。であればこそ、血の一滴を絞ってでも江戸に金を送り続けたのである。領民から搾り取る代わりに、法を犯してでも藩独自として収入の道を探った浜田藩の行動は何か潔い。処罰された関係者は地元では英雄としてあがめられている。明治維新を間近に控えた封建末期の出来事である。

作者註

1. この小説では、船名を「神東丸」としてある。古川薫の「閉じられた海図」には大型の会清丸としてある。しかし浜田県史には「会清丸」という船名は出てこない。いっぽう、同史には、直前の仕入れのための大阪行きは神東丸に乗っていたとあるが、この船は遠洋航海を行うには小さすぎるように思われる。また、八右衛門の供述書に、乗っていた船が江戸到着後壊れたので廃船にした船があるとしてある。それが神東丸なのかもしれない。これだけの大事件であるにもかかわらず船名やサイズがあやふやであるのは不思議なことである。作者の調査が足りないだけかもしれない。

2. 岡田頼母に病没した男子（元凱）がいたことは記録にあるが、孫娘がいたという記録はない。この小説に出てくる沙織は作者の創作である。

3. 八右衛門は実際には南洋へは行かず、竹島を中心として中継貿易を行っただけという説もある。しかし極端な日焼けやヤシの実など、全体の感じから、やはり南洋へ行ったのではないかと思われる。19世紀の中ごろともなれば南洋航海はさほど突飛なことではない。裁判の際、おそらく故意に南洋航海のことは

伏せられ、竹島に絞られたことから来た説ではないだろうか。

参考：島根県史（浜田市観光協会より入手）

「閉じられた海図」 古川薫

「海商・会津屋八右衛門」